

## 83 誌上発表

## 『鍼灸則』の病門について

若林 研二

日本鍼灸研究会

『鍼灸則』は菅沼周桂(1706-1764)により著わされ、明和四年(1767)に刊行された漢文体の鍼灸書である。周桂は摂津国の生まれで、名は長之、本書の奥付に『鍼灸摘要』『鍼灸治験』の二つの著作が「副出」とされているが、刊行された形跡は無く、おそらく伝存していない。その鍼灸について、浅田宗伯『皇国名医伝』巻上には「善使用鉄鍼。恒曰、鉄鍼刺皮肉甚利不傷氣血、我伎足破従来鍼家之妄矣。因以鍼灸復古自任。世目長之術曰古方鍼」と述べている。周桂自身も『鍼灸則』の凡例において、自身の鍼灸論を展開し、恒用の経穴が僅かに70穴であること、旧来の経絡説や是動・所生病、井榮兪経合、禁鍼灸説、刺鍼の深淺、施灸の総数などは一切採らず、毫鍼(鉄鍼)と三稜鍼(南蛮渡来の鋼鉄製)を使用することなどと述べている。

『鍼灸則』の内容は、大きく分けると、常用穴を挙げた「鍼灸則七十穴」、「鍼灸則」の本編、「附録」の三部からなる。巻頭にある「鍼灸則七十穴」では、70穴の経穴を挙げ、その取穴部位と主治症を紹介している。次に丁数の大半を占める「鍼灸則」の本編においては、77種の病門を立て、各病証についての簡単な説明と、鍼・灸・出血3種の治療法と使用する経穴を記している。巻末の「附録」では、禁鍼禁灸穴や補瀉迎隨などについて記載している。

『鍼灸則』は上記の70穴による鍼灸治療ばかりが目されるが、病門についての検討がなされていない。そこで本発表では、江戸期に国内で重刊された回数が多いもので、かつ病門が立てられている中国医書、すなわち『医方大成論』『万病回春』『医学正伝』『格致余論』『医学入門』『温疫論』『備急千金要方』『三因極一病証方論』所収の各病門の中から、『鍼灸則』の病門と同様のものを抽出し、集計することにより、『鍼灸則』の病門の典拠と内容の理解の一助とした。『鍼灸則』のテキストには、盛天堂漢方医学頒布会影印本(1980年)を使用した。また医書の選択については、小曾戸洋『日本漢方典籍辞典』(大修館書店、1999年)所収の「和刻漢籍医書出版年表」を参考とした。

調査の結果、『万病回春』と合致度が最も高く、77病門のうち61病門とほぼ一致した(一致50, 類似11)。次いで『医学正伝』と44病門でほぼ一致(一致33, 類似11)、『医方大成論』では39病門(一致24病門, 類似15)、『三因極一病証方論』では31病門(一致23, 類似7)、『備急千金要方』では16病門(一致12, 類似4)、『医学入門』では11病門(一致5, 類似6)、『格致余論』では4病門(一致3, 類似1)、『温疫論』では2病門(一致2)とほぼ一致した。

『万病回春』(龔廷賢著、1587年序成)は国内で20回以上も重刻され、江戸期に最も読まれた医書の一つであり、周桂も病門を選択する際に影響を受けたことが推察される。たとえば「瘡」の病証の説明では、「然廷賢以瘡期時発為信」と龔廷賢の説を引いている。

周桂は鍼灸における古方派的な立場を取るとされるが、前記した病門以外でも『内経』『難経』だけでなく、『原病式』『丹溪』『東垣』『虞搏(天民)』『錢仲陽』『薛立齋』などの説を引用しており、宋～明代の医学理論の影響を強く受けていることが伺える。『鍼灸則』の病門が、明代の『万病回春』『医学正伝』、あるいは『医書大全』の病証を摘録してなった『医方大成論』の病門と多く合致することも首肯できる。